

# 河本家古典籍のデジタル化プロジェクト

島根大学学術国際部図書情報課

情報サービスグループ 昌子喜信

## 1. はじめに

鳥取県東伯郡琴浦町の国指定重要文化財河本家住宅には、約880点余（約4,800冊）に上る古典籍が伝来している。島根大学附属図書館（以下「本学図書館」という。）は、国指定重要文化財河本家住宅保存会（以下「保存会」という。）と共同で、（公財）図書館振興財団の平成26年度提案型助成事業に応募し、採択された。これにより2014（平成26）年度から3か年計画で進めたデジタル化事業のこれまでの経緯と成果を報告する。

## 2. 河本家について

### 2.1 河本家由緒

河本家は、尼子氏の重臣を祖先に持ち、江戸時代を通じて代々大庄屋を務めた家である。その由緒と歴代については、保存会会長小谷恵造氏の論文<sup>1)</sup>に詳しい。その概略を同氏の論文に依って記すと以下のとおりである。

河本家の初代弥兵衛隆任は、尼子氏の十家老のうちの一人とされ、戦国時代の末期に八橋郡赤崎（現在の鳥取県東伯郡琴浦町赤碕）に移り住んだ。三代長兵衛は、松江城主堀尾忠晴の孫の菊姫を妻に迎えたとされ、そのことを示すものとして、同家の記録や墓碑のほか、菊姫が持参したとされる螺鈿細工を施した長刀が伝えられている<sup>2)</sup>。

三代長兵衛の長男長兵衛は、1657（明暦3）年の江戸の大火によって焼失した鳥取藩藩邸の再建のために、材木を江戸に搬送した功績が認められて、母の出身である堀尾姓を名乗ることを許された。

その頃三代長兵衛の次男甚右衛門は河本家四代として分家し、やがて五代弥三右衛門が寛文年間（1661～1673年）に住居を赤崎から<sup>のつ</sup>籠津（現在の鳥取県東伯郡琴浦町籠津）に移した。国指定重要文化財になっている母屋などは、この弥三右衛門の時代の1688（貞享5）年に建築されたものである。

以後、十二代伝九郎通繕まで、養子だった八代の元昌を除き、大庄屋、宗旨庄屋等の郡役人を代々務めた。明治維新以後、十三代芳蔵は館号を「稽古有文館」と名付け、学問を鍛えることを同家のモットーとし、十四代猷蔵は東京帝国大学文学部で東洋史を修めた。河本家住宅は、建築年代が明らかな民家としては山陰地方で最古に属するものであり、国指定重要文化財に指定されている古民家で家の歴史がこれほど明らかなのは珍しい<sup>3)</sup>。現在の当主、雅通氏は第十六代にあたる。

## 2.2 蔵書

河本家「稽古有文館」に伝わる蔵書は古典籍880点余（約4,800冊）からなる大規模な蔵書である。河本家古典籍の蔵書調査は、米子工業高等専門学校の原豊二氏（現在の所属はノートルダム清心女子大学）らにより開始され<sup>4)</sup>、2004（平成16）年度以降、国文学研究資料館に調査が引き継がれて、2014（平成26）年度まで10年間にわたって同館による調査が行われた。

蔵書の特徴や分野ごとの主要な古典籍の解題については、原豊二氏の論文<sup>5)</sup>に詳しく述べられている。それによると、多くは江戸時代の版本であり、中には明治期の版本や、江戸時代の写本も含まれ、その分野は、文学・歴史・仏教・漢籍など多岐にわたっている。その蔵書は、江戸時代から明治・大正期にかけて収集されたものと考えられ、特に十二代伝九郎通繕、十三代芳蔵の頃に収集されたものが中心となっていると考えられている<sup>6)</sup>。蔵書の分野別割合を次に示す（図1）。

なお、河本家古典籍は後述するように、2016（平成28）年より島根大学附属図書館に寄託されている。

## 3. 図書館振興財団助成事業

（公財）図書館振興財団の平成26年度提案型助成事業に採択された「「稽古有文館」に伝わる史資料のデジタル化とデジタルアーカイブ関連携公開事業」は、河本家「稽古有文館」の蔵書をデジタル化して公開することにより、河本家に伝わる特色ある古典籍コレクションの調査・研究を支援することを目的とするものである。本事業によってデジタル化されたコンテンツは、史資料を中心とするクラウド型デジタルアーカイブのプラットフォームである

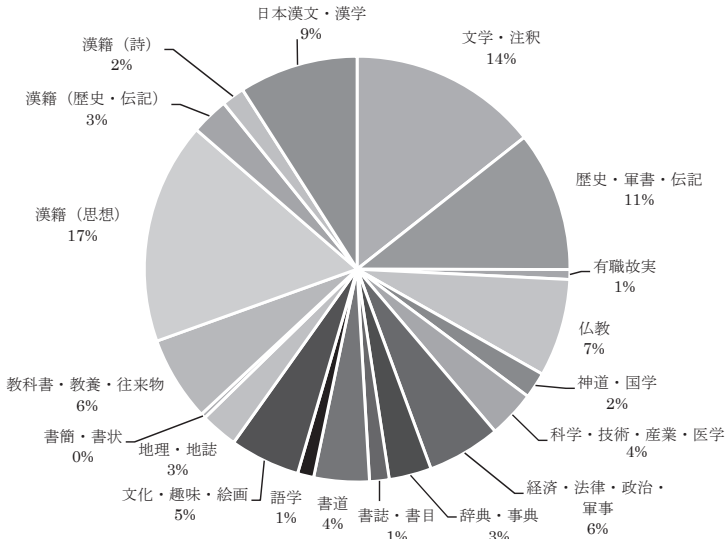


図1 河本家古典籍の分野別割合  
(原, 山藤. 稽古有文館 (河本家) 蔵古典籍目録<sup>7)</sup>. より作成)

ADEACから公開し、あわせて、既に同蔵書の一部の古典籍を公開している鳥根大学附属図書館デジタルアーカイブ（以下「鳥大アーカイブ」という。）とADEACを双方向に連携する実証実験を行うことによって、デジタルアーカイブ間の連携によるコンテンツの相互活用を検証することを目指した。以下、3か年計画で実施している事業の概要を示す。

### 3.1 デジタル化

国文学研究資料館による調査が行われ、調査カードが作成されている古典籍の内、約170点（約600冊）を対象としてデジタル化を行う計画である。メタデータは、国文学研究資料館の調査カードのデータを元に作成することにし、同資料館から調査済みの調査カードの画像データ及びExcelファイルに入力された調査データの提供を受けた。

本事業によってデジタル化した古典籍は、次のとおりこれまで数次に分けて公開しており、本稿執筆中の現在も撮影を継続中である。

2014（平成26）年度

第1次公開（2015年4月27日） 65点（147冊）

2015（平成27）年度

第2次公開（2015年10月9日） 1点（34冊）

2016（平成28）年度

第3次公開（2016年10月30日） 49点（127冊）

撮影済み未公開 28点（91冊）

撮影中 28点（236冊）

### 3.2 デジタルアーカイブ間連携実証実験

複数のデジタルアーカイブを連携させることによる利用促進の効果を検証するために、デジタルアーカイブ間の連携実証実験を行った。連携するデジタルアーカイブは、島大アーカイブとADEACである。

島大アーカイブは地域史資料のアーカイブとして、地域の個人や博物館等の機関が所蔵する史資料のデジタル画像を蓄積・保存し、活用のためのプラットフォームを提供している。

ADEACは、全国各地の史資料や自治体史の公開を目的とするクラウドシステムとしてすぐれた機能を持つもので、ADEACに搭載された史資料や自治体史を対象とする横断検索機能を持っている。

この2つのデジタルアーカイブの双方に、連携先システムのメタデータを搭載して統合的に検索を行い、連携先システムのコンテンツの画像データを表示する形で連携を実現した（図2）。ADEACには、島大アーカイブ上に既に登録されている河本家古典籍と本学図書館の代表的なコレクションである桑原文庫のメタデータを搭載し、島大アーカイブには、ADEAC上の河本家古典籍のメタデータを搭載した。2016（平成28）年12月現在の搭載しているメタデータ件数は次のとおりである。

ADEAC上の島大連携メタデータ

河本家古典籍 133件（11点133冊）

桑原文庫 727件（194点727冊）

島大アーカイブ上のADEAC連携メタデータ

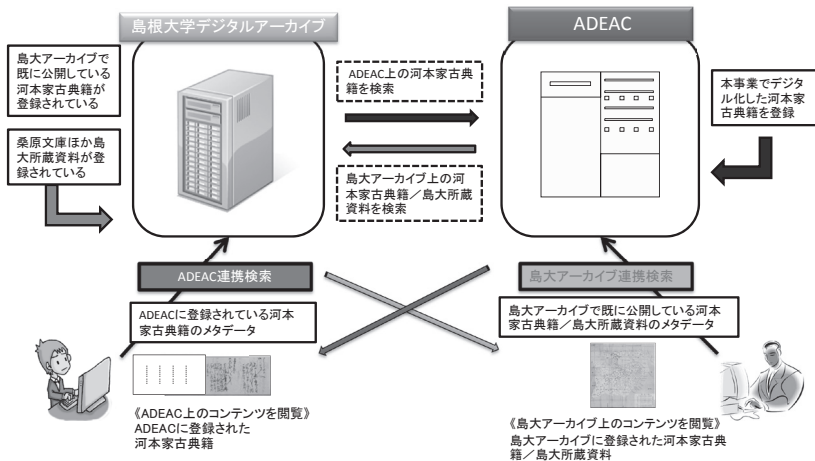


図2 デジタルアーカイブ間連携実証実験

河本家古典籍 181件 (66点181冊)

## 4. ADEACからの公開

### 4.1 ADEACの基本機能

ADEACの画面上では、「河本家古典籍」と「島根大学所蔵古典籍」の2つの入り口を設けた。「河本家古典籍」では、原豊二氏作成の目録の分野区分に従って分野ごとのインデックス画面を作成した。また、「島根大学所蔵古典籍」では島大アーカイブ上の桑原文庫を検索するために、桑原文庫のインデックス画面を作成した。図3に、河本家古典籍を閲覧する際の画面遷移を示す。

### 4.2 ADEACの特徴的な機能

#### 4.2.1 横断検索

ADEACに搭載されている全てのコンテンツを対象とした横断検索が可能である。横断検索は、目録(メタデータ)または本文を対象として検索を行う。本文検索は、搭載されている自治体史などの本文テキストや古典籍・古文書の解説テキストを対象に検索するものである。

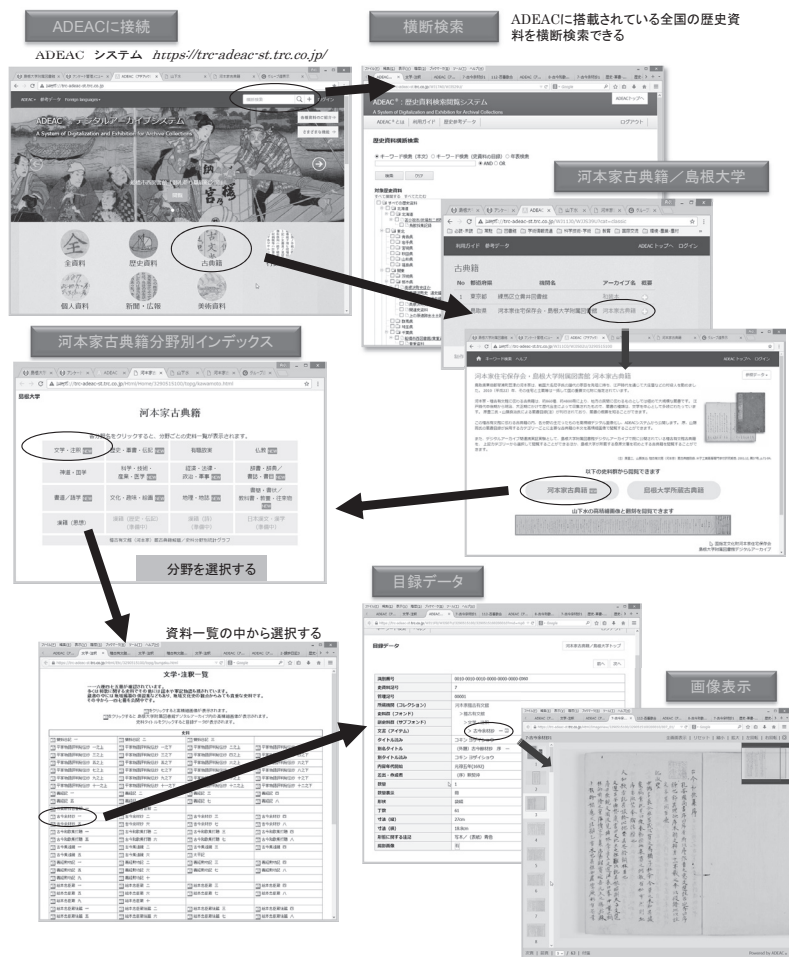


図3 ADEAC画面遷移

#### 4.2.2 解読テキストの並べ・重ね表示

古典籍・古文書の解読テキストが搭載されている場合は、画像と解読テキストを画面上で並べて表示したり、重ね合わせて表示したりすることができる。河本家所蔵の『山水』は、山崎真克氏により翻刻されているため<sup>8)</sup>、この解読テキストを搭載し、テキストの並べ・重ね表示を実現した。その画面例を図4に示す。

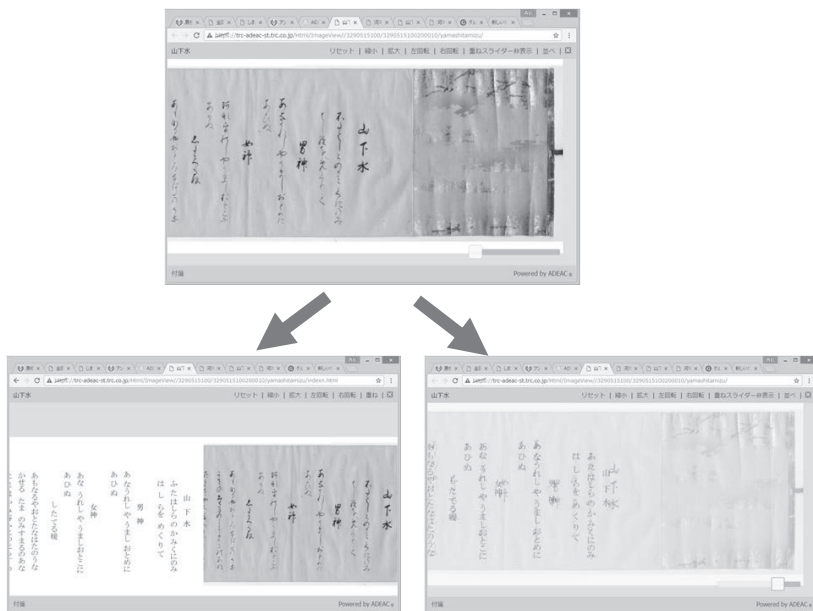


図4 画像と解読テキストの並べ表示（左下）、重ね表示（右下）

### 4.3 デジタルアーカイブ間連携検索

デジタルアーカイブ間連携検索の実際は、次のとおりである。

#### 4.3.1 ADEACから島大アーカイブへの連携

ADEAC上から検索可能な島大アーカイブ上に登録されている河本家古典籍と桑原文庫の古典籍は、ADEACの分野別一覧画面及び目録詳細画面に青色のカメラ・アイコンを表示し、ADEACに画像が登録されている河本家古典籍（赤色のカメラ・アイコン）と区別できるようにした。ADEACから島大アーカイブ上のコンテンツを画像表示する場合は、この青色のアイコンをクリックすることで、島大アーカイブにリンクして画像を閲覧できる（図5）。

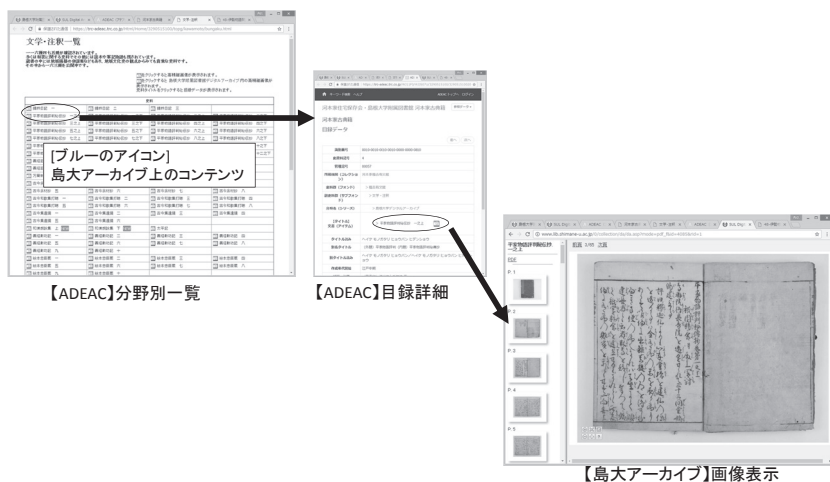


図5 ADEACから島大アーカイブ上のコンテンツを閲覧

#### 4.3.2 島大アーカイブからADEACへの連携

島大アーカイブ上から検索可能なADEAC上の河本家古典籍は、一覧画面にサムネイル画像なしで表示（島大アーカイブ上のコンテンツはサムネイル画像を表示）し、目録詳細画面でADEACへのリンクを表示した（図6）。

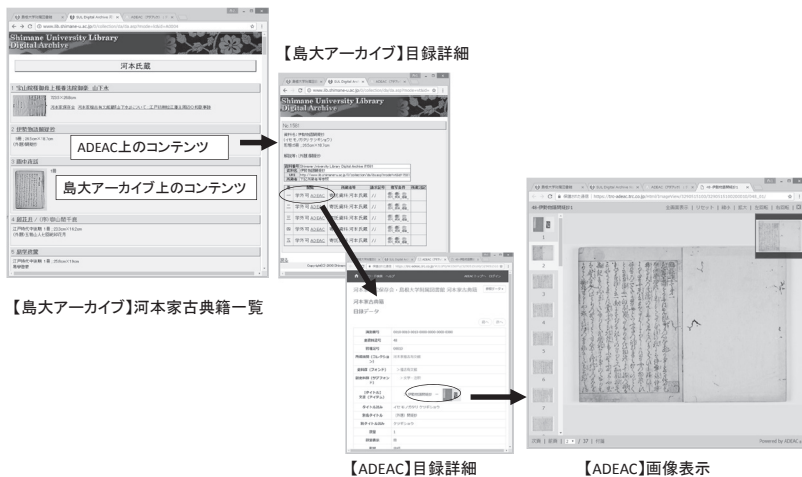


図6 島大アーカイブからADEAC上のコンテンツを閲覧



## 5. アクセス件数

### 5.1 月別アクセス件数の推移

ADEACでの河本家古典籍公開後の月ごとの画像表示回数の推移を図7に示す。また、1冊当たりの月ごとの画像表示回数の推移を図8に示す。第2次公開（2015年10月）以後は、月に6,000～11,000回の画像表示回数を維持している。また、1冊当たりの画像表示回数は、月にほぼ20回～50回の間で推移している。

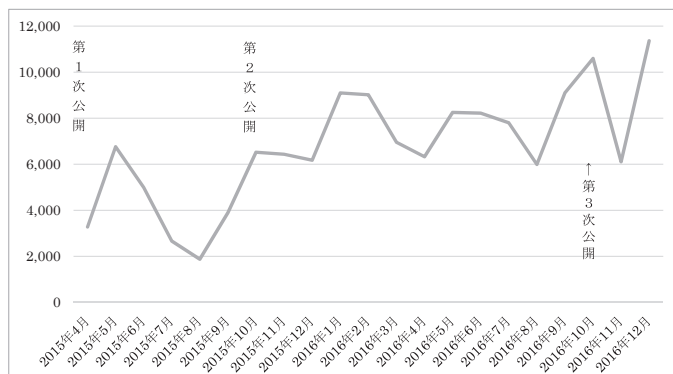


図7 画像表示回数の推移

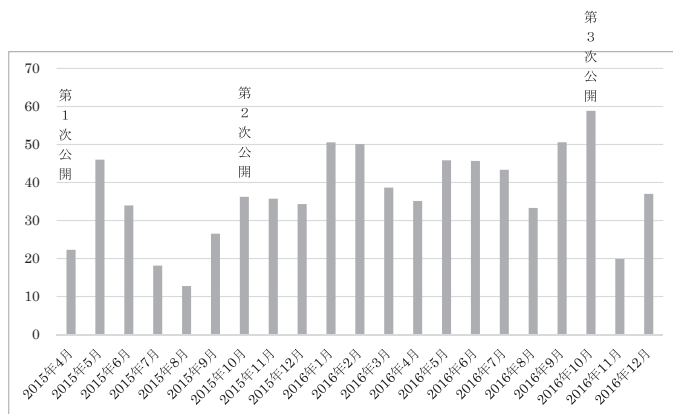


図8 1冊当たりの画像表示回数の推移

## 5.2 デジタルアーカイブ間連携実証実験の効果検証

ADEACを経由した島大アーカイブ上の画像の閲覧状況を表1に示す。

表1の①欄は、島大アーカイブ上の桑原文庫と河本家古典籍の画像表示回数をそれぞれ表している。②欄は、ADEACの分野別一覧画面及び目録詳細画面にある島大アーカイブ上の連携コンテンツへのリンクである青色のカメラ・アイコンをクリックした回数を表す。青色のアイコンをクリックした後、中間ウィンドウ（「まもなく、島根大学デジタルアーカイブへ移動します。…」という表示がでる）を経由した後、島大アーカイブ上の画像が表示される。画像が表示される前に中間ウィンドウを閉じてしまうケースもあると考えられ、実際に画像を表示した回数は②欄の数値よりも少ないと考えられる。

②欄の数値がADEACを経由して島大アーカイブ上の画像表示回数を表したものではないため、必ずしも正確なことは言えないが、島大アーカイブ上の桑原文庫の画像表示総回数（①欄）の内、多くの割合がADEAC経由と考えられる。一方、島大アーカイブ上の河本家古典籍の画像表示回数（①欄）は、②欄よりも大きくならなければならないにもかかわらず小さくなっているのは、青色アイコンをクリックした後、画像が表示される前に中間ウィンドウを閉じてしまったことなどによると思われる。

表1 ADEACを経由した島大アーカイブ上の画像閲覧回数

|        | ①島大アーカイブ上の画像表示総回数 | ②ADEAC上での島大連携コンテンツへのリンクのクリック回数 |
|--------|-------------------|--------------------------------|
| 桑原文庫   | 81,767            | 40,346                         |
| 河本家古典籍 | 14,933            | 20,199                         |

\* 集計期間：2015.4～2016.12

島大アーカイブを経由したADEAC上の画像の閲覧状況を表2に示す。

表2の①欄は、ADEAC上の河本家古典籍の画像表示総回数を表している。②欄は、島大アーカイブを経由した画像表示回数である。島大アーカイブを経由してADEAC上の画像を閲覧する回数は非常に小さいことがわかる。

表2 島大アーカイブを經由したADEAC上の画像閲覧回数

|        | ①ADEAC上の画像表示総回数 | ②島大アーカイブ経由の画像表示回数 (①の内数) |
|--------|-----------------|--------------------------|
| 河本家古典籍 | 141,459         | 267                      |

\*集計期間：2015.4～2016.12

デジタルアーカイブ間連携実証実験の結果から、ADEACから島大アーカイブ上のコンテンツの利用において、大きな効果があることが分かった。ADEACは、公開準備中を含めて55機関が参加するシステム（2016年10月現在）であり、史資料の分野におけるアグリゲーターとみなすことができる。島大アーカイブのような個別アーカイブが、アグリゲーターとしてのADEACとメタデータレベルで連携することにより、個別アーカイブにとってはコンテンツの可視性を高め、利用率の向上を図ることができる。

一方でADEACにとっては、ADEACに参加していない個別アーカイブとメタデータレベルで連携することによって、個別アーカイブのコンテンツを統合的に検索することが可能となり、ADEACから利用できるコンテンツを豊富化することができる。

## 6. 資料保存対策

デジタル化の作業を進めるにつれて、資料の保存状態が非常に悪い状況であることが分かってきた。多くの資料に虫の被害が見られたが、虫の被害は過去のものではなく、現在も進行中であることは明らかだった。資料によってはカビの被害を受けているものも見受けられた。

河本家ご当主と保存会会長に現状を報告し、一旦デジタル化作業を中断して、保存対策を優先することにした。速やかに殺虫処理をして虫の被害を食い止める必要があったが、本学図書館の二酸化炭素による殺虫処理設備では、一度に処理できる量が少なく、膨大な量の資料全部を処理するためには、何度も繰り返し行う必要があり、現実的とは思われなかった。また、二酸化炭素では、虫に対しては有効であるが、カビには効果がないことも問題であった。そこで、島根県立古代出雲歴史博物館（以下「歴博」という。）に相談し、燻蒸設備を借り受けることになった。燻蒸処理の対象は、大小の木箱40箱、文書箱48箱に収納された古典籍全点である（写真1）。

事前作業として、2015（平成27）年9月に2日間かけて、目録リストと資料現物の照合作業を行った。歴博での燻蒸作業は2016（平成28）年1月～2月にかけて2回にわたって行うことになり、歴博への搬入に先立ち、保存会のメンバーが木箱を養生材で梱包した。資料の運搬は琴浦町教育委員会のトラックを使用して一度にすべての資料を搬入した（写真2）。

歴博での燻蒸処理は、燻蒸庫内に資料を置き、エキフュームを投入して1週間処理する方法で行われた。2回の処理がすべて終わったのち、再び木箱を梱包して、資料を搬出した。河本家において資料の収蔵施設が整備されるまでの緊急避難的な措置として、当面島根大学で資料を寄託受けすることにし、法文学部の一部屋と附属図書館の第二貴重資料室に資料を搬入し、保管している（写真3）（写真4）。



写真1 河本家土蔵内の木箱の収納状況



写真2 島根県立古代出雲歴史博物館への搬入



写真3 法文学部



写真4 附属図書館第二貴重資料室

## 7. 成果公開

河本家住宅の春・秋の公開に合わせて、プロジェクトの成果報告として、これまでに次のような講演及びシンポジウムを行っている。

2015（平成27）年4月29日

講演 「河本家古典籍から見る江戸文学の世界」

田中則雄 島根大学法文学部教授

講演 「河本家古典籍のデジタル化と公開Ⅰ」

昌子喜信 島根大学附属図書館情報サービスグループ・リーダー

2015（平成27）年10月11日

講演 「江戸後期の長編小説—『絵本忠臣蔵』をめぐって—」<sup>9)</sup>

田中則雄 島根大学法文学部教授

講演 「河本家古典籍のデジタル化と公開Ⅱ」

昌子喜信 島根大学附属図書館情報サービスグループ・リーダー

また、3年間のプロジェクトの最終年度である2016（平成28）年10月に琴浦町生涯学習センター「まなびタウンとうはく」においてシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、河本家古典籍のこれまでの調査・研究及びデジタル化の経緯と到達点を報告し、今後の展望を考えることを目的としたものである（写真5）。

2016（平成28）年10月30日

シンポジウム

基調講演「河本家の古典籍の全体像と特色—調査開始以来の歩み—」<sup>10)</sup>

原 豊二 ノートルダム清心女子大学文学部准教授

パネルディスカッション

コーディネータ：田中則雄（島根大学法文学部教授）

パネリスト：坂本敬司（新鳥取県史編さん委員会近世部会委員）

原 豊二（ノートルダム清心女子大学文学部准教授）

山崎真克（比治山大学現代文化学部教授）

昌子喜信（島根大学附属図書館）



写真5 シンポジウム

## 8. 課題と展望

3年間のプロジェクトは、河本家古典籍をデジタル化して公開することを直接的な目的としたものであるが、当初の目的を達成したことのほかに、当初計画にはなかった資料保存対策など資料管理の面で副次的な成果をあげることができた。また、シンポジウム開催により、河本家古典籍の調査・研究の現況を確認し、今後取り組むべき方向性を示すことができた意義は大きい。

ここで、本プロジェクトの成果を今後を引き継ぎ、発展させていくために課題を整理しておきたい。課題の第1は、デジタル化の継続である。本プロジェクトにおいてデジタル化した点数は171点（643冊）であり、河本家古典籍の約1割である。虫損のため、撮影に適さないものを除き、古典籍コレクション全体のデジタル化を行うことが望ましい。そのためには、引き続き外部資金の獲得を模索し、デジタル化を継続していく必要がある。

課題の第2は資料の活用についてである。河本家古典籍の活用は、研究面、教育面、地域における資料活用の面のいずれにおいても、まだ始まったばかりと言える。デジタル化と公開を継続して進めることによって資料の活用の基盤が整い、活用の促進が期待されるが、活用を一層進めるためには、デジタル化されて公開されているコンテンツを使用するためのハードルをできる

だけ低くしておくことが望まれる。そのために、コンテンツの使用にあたって、事前申請により許諾を得る手続きをしなくてもよいように、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス<sup>11)</sup>等のライセンスをコンテンツに付与することの検討が望まれる。

## 謝辞

河本家ご当主の河本雅通さんご夫妻、保存会の小谷恵造会長はじめ保存会の皆さん、琴浦町教育委員会の林原克幸さん及び池口由美子さんには、助成金の申請からプロジェクトの推進に至るまで種々ご協力いただきました。また、田中則雄島根大学法文学部教授、原豊二ノートルダム清心女子大学文学部准教授、山崎真克比治山大学現代文化学部教授には、プロジェクトを進める際に貴重なアドバイスをいただくとともに、シンポジウムの開催にあたって多大なるご協力をいただきました。そして、島根県立古代出雲歴史博物館の澤田正明主任学芸員には、資料の燻蒸においてご協力いただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

## 注・参考文献

- 1) 小谷恵造. 鳥取の旧家河本家の由緒と保存文書から. 水戸史学. 2005.11, 第63号, p.2-17.
- 2) 山陰中央新報. 2008.2.18の記事による。
- 3) 河本家住宅は2010（平成22）年に国の重要文化財に指定された。なお、河本家住宅の調査報告として、次の文献がある。  
鳥取環境大学浅川研究室編集. 河本家住宅：建造物調査報告書. 琴浦町教育委員会, 2005.3, 98p.
- 4) 原豊二, 山藤良治. 稽古有文館（河本家）蔵古典籍目録. 米子工業高等専門学校研究報告. 2001.12, 第37号, p.71-84.
- 5) 原豊二. 稽古有文館（河本家）蔵古典籍解題. 米子工業高等専門学校研究報告. 2003.12, 第39号, p.62-68.
- 6) 原豊二. 河本家の古典籍の全体像と特色：調査開始以来の歩み、あるいは『百番歌合』のこと. 淞雲. 2017.3, 第19号, p.93-104.
- 7) 前掲4)
- 8) 山崎真克. 河本家稽古有文館蔵『山下水』について：江戸初期松江藩主周辺の和歌事跡. 古代中世国文学. 2006.6, 22号, p.78-90.

9) 田中則雄氏の講演に関連して、次の文献を参照のこと

田中則雄. 河本家に伝存する近世実録と読本. 松雲. 2016.2, 第18号, p.68-89.

10) 原豊二氏の基調講演に関連して、前掲6)の文献を参照のこと

11) “クリエイティブ・コモンズ・ライセンスとは”. Creative Commons Japan.  
<https://creativecommons.jp/licenses/>, (参照2017-01-10).